

3 コミュニケーションに関する発達段階表（前言語期）

| 段階 | 前言語期（生後～16か月程度） | | | | | | | | | | | |
|------------|--|---|--|--|---|--|--|---|--|---|---|--|
| | 聞き手効果段階（0～10か月） | | | | | | 意図的伝達段階（10～12か月） | | | 命題伝達段階（12～16か月） | | |
| 各段階について | 大人が子どもの行動を何らかの意図を表すものとして受け取り、その意図を表情や状況から読み取って応えていくことで、やりとりが成立する。 | | | | | | | | | | | |
| | 【0～2か月】 | 【2～4か月】 （二項関係の成立期） | 【4～6か月】 （三項関係への移行期） | 【6～10か月】 （三項関係の成立期） | | | | | | | | |
| 各段階のキーワード | ・周囲の環境に適応するための準備期。 ・生理的なものや快・不快の表明などが主である。 ・人に伝えようという意思ははっきりしていない。 | ・人や物の動きに対して注意を向けるようになる。 ・物を触るとどのような反応を示すか、といった自分の行動の結果に注意が向く。 ・大人からの働きかけに反応し、人や物に自ら働きかけるようになる。 ・相手の話を受けて応える、イントネーションを真似る、協応した動きをする、といったやりとりらしい関係が成り立つ。 | ・多くの場合、人よりもむしろ物に注意を向けるようになり、いろいろな物を転がしたり、叩いたり、なめたり、気に入った方法で働きかけを続ける。 ・積極的に物に働きかける。遊びが一段落したり、うまくいかなくなると、大人や周囲の状況に気付く。 ・自分の要求をかなえてくれる存在としての大人の役割に気付く。 | ・要求の実現者としての大人に注意を向けるようになる。 ・興味関心が大人の意図に移行する。 ・大人の表情や身振り、行動からその意図を読み取り、自分の行動の社会的な意味について学習し始める。 ・発声や身体運動的な身振りで意図を伝えようとする。大人の意図に気付き始め、視線を使って大人に気持ちを伝え、確認しようとする。 | | ・共同注意（人と物をお互い見て、その人と一緒に何かに注意を向けること） ・三項関係（子どもと大人が一つの行為や対象を共有し合うこと） ・ショーイング（物をかざして、関わってくれる相手に見せる） ・クレーン（要求をするときに、大人の手を引っ張って目的を達成させようとする動作） ・志向の指さし（相手が指さした方向を見る。相手が指さした方向と一緒に指さしする） | | | ・自分の伝えたいことを、社会化された伝達手段により他人に伝達することができる。 ・「～に～を～してもらおう」「～に～してほしい」といった「誰に、何をしてほしいか」が明確になり、社会化された伝達手段で伝えようとする。 ・渡す、見せる、指さすなどの身振りに発声や視線が伴うことが多く、これらの伝達手段を複合化して用いる。 ・子どもが伝えていることは分かるが、伝えたい内容が分からないことも多い。 | | | |
| | ・生理的微笑（意図した笑顔ではなく、本能的に表出される微笑） | ・社会的微笑（親しい人を見たときに微笑む） ・クーイング（舌を使わずに、「あ～」「う～」「えっえ」などの母音を発声する） ・二項関係（人や物に注意を向ける） | ・喃語（「あうあう」「ばいばい」など、子音を含む多音節からなる音を発声する。母音+母音もしくは母音+子音等の多音節の音を発声する） | ・共同注意（人と物をお互い見て、その人と一緒に何かに注意を向けること） ・三項関係（子どもと大人が一つの行為や対象を共有し合うこと） ・ショーイング（物をかざして、関わってくれる相手に見せる） ・クレーン（要求をするときに、大人の手を引っ張って目的を達成させようとする動作） ・志向の指さし（相手が指さした方向を見る。相手が指さした方向と一緒に指さしする） | | ・定位の指さし（新しい発見や対象を指さし、それを身近な大人に共感してもらうための指さし） ・伝達手段の複合化（視線、発声、行為を合わせて、意図を伝達しようとする。声を出して指さしをするなどの時間差の使用もできるようになる） ・言葉の獲得 | | | | | | |
| 月 | 0～2か月 | 3か月 | 4か月 | 5か月 | 6か月 | 7か月 | 8か月 | 9か月 | 10か月 | 11か月 | 12か月～16か月 | |
| 各段階で見られる特徴 | ・音に対して動きを止める。 ・あやされると視線が合う。 ・生理的な微笑み。 ・音声に母音が含まれる。 ・生理的な快・不快が分かる。 | ・あやされると相手を見て声を出す。 ・喉子音 ・顔のかたちを見て、自分から微笑み、声を出す。（社会的微笑） | ・あやされると相手を見て、声を出すして笑い、四肢を活発に動かす。 ・母親とそれ以外の人の顔の違いが分かる。 ・第三者に自分から微笑みかけ、発声することができる。 | ・あやされると、キャッキャッと声を出してはしゃぐ。 ・喃語が始まる。 ・口唇破裂音 | ・人見知りが始まる。 ・感情が分化してはしゃぐ。 ・落ちた物を探る、分かっていることを予測して期待する行動が見られる。 | ・人見知りが激しくなる。 ・感情が分化し、あやされると機嫌をなおす。 ・音節をつらね、強弱、高低をつけ喃語をしゃべる。 ・声を出して要求・主張をする。（期待の手のばし、相手への発声による呼びかけ） ・玩具を取ると、取り返そうとする。 | ・好奇心がいったいどこまでつき、おもちゃを目の前で隠すと、隠された方向を向いて探すようになる。 ・繰り返しの行動（物を何度も繰り返して落とす。） ・よく抱いてもらっている人を見ると、自分から体を乗り出して抱いてもらいたがる。 ・自分の名前を呼ばれると反応する。 ・大人のミラーリング、音声のモニタリングが分かり、やりとりになる。 ・8ヶ月不安が見られる。 | ・バイバイをする。 ・繰り返し遊びややりとり遊びができるようになる。 ・叱られたことが分かり始める。 ・物をかざし、人に見せる。（ショーイング） ・手をとって「やって」を要求する。（クレーン） ・「マンマン」などの志向の音声が出る。 | ・自分の名前を呼ばれて分かる。 ・ほめてもらうと繰り返す。（大人の言葉を理解して行動する） ・「ちょうだい」に対して、相手に差し出す。 ・相手との間で第三者を共有し始める。 ・いたずらが盛ん。 ・伝達手段が複合する。（指さしと発声） ・簡単な身体模倣ができて始める。 ・初語が出る。 | ・定位の指さしが始まる。（共同行為で絵本を見て、意味を察して指さしをする。） ・理解力が増えてくる。 ・相手のしていることに興味を示し、自分もやろうとする。 ・他の子の持っている物に手を出す。 ・「マンマ」等の定位の音声を発出する。 ・言葉で模倣を引き出すことができる。つもり行動が芽生える。 | ・要求の指さし。 ・「～ではない～だ」の概念が芽生え始める。 ・感情表現が豊かになる。 ・ふり遊びができる。 ・だだをこねるが、きっかけがあると気持ちの転換ができる。 ・言葉で要求し、「イヤ」－「ウン」、「チカウ」－「ソウ」の対感情が成立。 ・命名を基本に言葉が30～40語ぐらいに増える。 | |
| | 生きるために大切な表出を備えている | 親しい人の存在を知る 視線の共有が始まる | | | 外界を認知する力、探求する力が目覚しく発達 感情の分化が特徴的で、意図が出現してくる | | | 試行錯誤による新手段の発見 柔軟な変化を伴う繰り返しの行動 | | | 自他の区別ができる認識・コミュニケーション 社会性の画期的な節目 | |
| 各段階での支援の仕方 | ・自発的な動きを生かし、子どものペースで関わるようにする。表情や動きの変化を読み取りながら、子どもの手を取り、自分の身体や物を一緒に触る。 ・身体を通じた関わりを多くする。（抱っこ、タッピング、スキンシップ等） ・子どもの近くで、対面し、自然と目が合うようにやりとりを行う。 ・子どもの表情や動きを読み取り、それらしい意味付けをし、やりとりが継続できるようにする。（音楽、光振動などを使った遊び等） | ・身近な人との関わりを認識し、深めるために、関わり方に特徴を持たせる。（サインを決める、抱っこ、揺れ遊び等） ・人と人との関係において、視線や気持ちを合わせ、気持ちを共有したり、要求が伝わったりするような体験ができるようにする。（目や声を使ってのやりとり遊び等） ・パターンを決めたやりとり遊びを楽しむようにする。（関わり遊び等） ・子どもが理解しやすい、光や音が出るおもちゃや楽器と一緒に遊ぶ。 ・大人も近くで関わりながら一緒に遊び、子どもの行動をほめたり、変化に反応したりすることで、三項関係へ発展させていく。（歌絵本等） | ・子どもの気持ちやサインを読み取り、応答する。 ・ほめたり、同じように声を出したり、動かした場所を触ったりし、自分の表出と大人の反応との関係に意識が向くようにする。大人の関わりを意識が向くにくい場合は、子どもの興味関心がある活動の中に大人が入る形で関わる。 ・意思表示ができるよう、yes/no や見比べの選択場面を設ける。 ・子どもの発声や身体の動きを大事にし、繰り返し行ったり十分に時間をとったりする。 | ・子どもの動きや声を真似することで、子どもにフィードバックし意図が伝わったことの実感が持てるようにする。 ・大人に注意が向くように、好きな歌と一緒に歌いかけたり、子どもの表出を真似したりする。また、繰り返し遊びの中で、バリエーションを付けたり、間をあけたりして、大人の行動に注目させる。（歌遊び、まねっこ遊び） ・物を介して人とやりとりができるようにして、子どもの発信を待ち、大人に注意を促す動き（声、動作、動き）を引き出す。（子どもの好きな活動が分かりやすい活動の中に、大人が入り、表情豊かに接したり、子どもの視界に入ったりしながら関わる） ・少しずつ対象物との間に介入するものを取り入れたり、操作を難しくしたりする。（バチやひも、スイッチ等） | ・新しい伝達手段を獲得できるよう、見本を見せたり、繰り返しの言葉かけをしたりすることで、適切な発音につながるようにする。 ・子どもの気持ちに寄り添い、言葉で質問したり、動きを言語化したりして伝える。（子どもに、選択・要求・拒否などを表現できる機会を与える。） ・子どもの言葉や発信に、説明や補足を加えてフィードバックする。 ・模倣しやすいように、好きな動きを取り入れたり、簡単な動作や言葉を取り入れた歌遊びをしたりする。（模倣遊び、見立て遊び） | | | | | | | |

参考文献：坂口しおり（2006）『障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定』 株式会社シアーズ教育新社
 徳永豊（2014）『障害の重い子どもの目標設定ガイド 授業における「学習到達度チェックリスト」の活用』慶応義塾大学出版会株式会社
 橋本正巳（2016）『障害の重い子どもへのかかわりハンドブック～マルチアレンシングサポートの観点から～』 社会福祉法人 全国心身障害児福祉財団
 八束佳代（2014）『重度・重複障害のある子どものコミュニケーション能力の評価方法と発達段階に合わせた指導内容表の開発』
 菊野春雄（2016）『乳幼児の発達臨床心理学——理論と現場をつなぐ』北大路書房